W-4-3

小林方言の呼びかけイントネーション*

平田 秀（国立国語研究所）

1. はじめに

本発表では、宮崎県小林方言の呼びかけイントネーションについて扱う。宮崎県小林市は宮崎県の南西部に位置する人口 4.5 万の市である。

第 2 節で述べる通り、小林方言は一型アクセント方言であり、平叙文では最終音節が高い音調を担う。それに対し、第 3 節で扱う呼びかけ文においては最終音節の内部で下降が起こる。この下降の有無によって平叙文と呼びかけ文が区別される。

図 1 宮崎県

図 2 小林市

2. 小林方言のアクセント体系

小林方言は一型アクセント体系をもつ方言である。平山輝男 (1936, 1951, 1974) では、小林方言を含む諸県（もろかた）方言について、一型アクセント体系をもつ方言である旨が述べられている。佐藤久美子 (2013) では、小林方言のアクセント・ピッチパターンについて詳細に論じられている。

(1)に示す通り、東京方言にみられる語彙的なアクセントの対立は小林方言にはみられず、すべての語は最終音節において高いピッチが生じる。‘[’は音節間で生じる上昇を、‘]’は下降を表す。以降、音調表記は本発表で用いるものに改めた上で引用する。

(1) 東京方言と小林方言（佐藤 2013: 23）

a. 東京方言		b. 小林方言	
[ア]メ。	＜雨＞	ア[メ。	＜雨＞
ア[メ。	＜飴＞	ア[メ。	＜飴＞

小林方言のアクセントの長さを構成する単位はモーラではなく、音節である。最後の音節が特殊モーラ（二重母音の第 2 モーラ・長母音の第 2 モーラ・撥音・促音）を含む場合、最終モーラではなく最終音節全体において高いピッチが生じる。

(2) 小林方言のアクセントの長さを構成する単位（佐藤 2013: 23）

ケ[ムイ。	＜煙＞
ガッ[コー。	＜学校＞
オ[ハン。	＜あなた＞
オ[トッ。	＜弟＞

* 本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」の研究成果を報告したものである。

3.　小林方言の呼びかけイントネーション

本節では、小林方言の呼びかけイントネーションについて、80 代の男性話者（以降、話者 A とする）を対象とした現地調査の結果を報告する。いくつのイントネーション型があるかについて 3.2 節で、名詞の語彙的なアクセント型がどのように変容するかについて 3.3 節で、アクセント型の区別がなくなる中和現象が起こるかについて 3.4 節で、疑問イントネーションとどのように区別されるかについて 3.5 節でそれぞれ述べる。なお、小林方言の呼びかけイントネーションは話者間の差異が非常に大きく、それについては第 4 節で述べる。

3.1.　調査の概要

本発表に先立って、5 名の小林方言話者を対象に対面調査を実施した。5 名の話者の年齢層・性別は以下の通りである。

表 1　本発表で対象とする小林方言話者

	年齢層	性別
話者 A	80 代	男性
話者 B	60 代	男性
話者 C	60 代	女性
話者 D	70 代	男性
話者 E	60 代	女性

3.2.　呼びかけにいくつのイントネーション型があるか?

話者 A の体系では、(1) (2)に示した通り平叙文は最終音節に高いピッチが生じる形で実現するが、(3)に示す呼びかけ文では最終音節が下降音調を担う形で実現される。‘。’は平叙文を、‘！’は呼びかけ文であることを表す。

(3) 話者 A の呼びかけイントネーション

	平叙文	呼びかけ文
最終音節が軽音節	ナオ[ミ。	ナオ[ミ]ー！
最終音節が重音節	セン[セー。	セン[セ]ー！

(3) に示した通り、最終音節が軽音節であっても重音節であっても、共通して最終音節が下降音調を担う形となり、話者 A の体系における呼びかけ文には 1 つのイントネーション型を想定できる。

3.3.　名詞の語彙的なアクセント型がどのように変容するか?

話者 A の体系においては、平叙文は最終音節が高いピッチを担う音形で実現するが、呼びかけ文では最終音節が下降音調を担う形で現れる。下降音調の有無によって、平叙文と呼びかけ文が区別される。

3.4.　アクセント型の区別がなくなる「中和現象」が起こるか?

小林方言は一型アクセント方言であり、アクセント型の区別をもたないため、中和現象は生じない。

3.5.　疑問イントネーションとどのように区別されるか?

(4)に示す通り、話者 A の体系においては、疑問文には終助詞「-カ／-ケ」が義務的に付与される。

このため、呼びかけ文と疑問文は形態的に区別される。‘？’は疑問文であることを表す。

(4) 小林方言の呼びかけ文と疑問文

	平叙文	呼びかけ文	疑問文
＜早紀＞	サ[キ。	サ[キ]ー！	サ[キ]カ？／サ[キ]ケ？
＜先生＞	セン[セー。	セン[セ]ー！	セン[セー]カ？／セン[セー]ケ？

4. 呼びかけイントネーションの話者間の差異と通時変化

第 3 節冒頭で述べた通り、小林方言の呼びかけイントネーションは話者間の差異が非常に大きい。現時点で現地調査を実施した 5 名の小林方言話者の体系は、(5)に示す 4 パターンに分類される。

(5) 小林方言の呼びかけ文イントネーションの話者間の差異

	最終音節が軽	最終音節が重	
パターン 1	義務的に下降が起こる	義務的に下降が起こる	話者 A（80 代男性）（第 3 節）
パターン 2	下降が起こる場合と起こらない場合がある	下降が起こる場合と起こらない場合がある	話者 B（60 代男性）・話者 C（60 代女性）
パターン 3	下降は起こらない	下降が起こる場合と起こらない場合がある	話者 D（70 代男性）
パターン 4	下降は起こらない	下降は起こらない	話者 E（60 代女性）

(5)中にパターン 1 として示したのは第 3 節で述べた 80 代男性話者の体系で、最終音節が軽音節であっても重音節であっても、呼びかけ文においては義務的に下降が起こる。それに対し、パターン 2 の話者では、最終音節の軽重に関わらず、下降が起こるパターンと下降が起こらないパターンの両者が観察される。

(6) (5)・パターン 2 の話者（話者 B・60 代男性）
最終音節が軽: ナオ[ミ]ー！　～　ナオ[ミ！　　（併用）
最終音節が重: オカー[サ]ン！～　オカー[サン！（併用）

(6)中の下降が起こるパターンと起こらないパターンの両者について、60 代男性の話者 B については自由変異に近いようである。同じパターン 2 に分類される 60 代女性の話者 C の体系では、最終音節の軽重に関わらず下降が起こるパターンと起こらないパターンの両者が観察されるのは話者 B と共通しているが、下降が起こるパターンについて「かなり強い調子である」とのコメントがあった。
(5)中にパターン 3 として示した 70 代男性の話者 D の体系では、最終音節が重音節の場合は下降が起こるパターンと起こらないパターンがみられるが、軽音節の場合は下降が観察されなかった。

(7) (5)・パターン 3 の話者（話者 D・70 代男性）
最終音節が軽: ナオ[ミ！　　（*ナオ[ミ]ー！）
最終音節が重: バー[チャ]ン！　～　バー[チャン！（併用）

また、(5)中にパターン 4 として示した 60 代女性の話者 E の体系では、呼びかけ文において、最終音節のが軽音節であるか重音節であるかにかかわらず、下降が観察されなかった。

(8) (5)・パターン 4 の話者（話者 E・60 代女性）
最終音節が軽: ナオ[ミ！　　（*ナオ[ミ]ー！）
最終音節が重: バー[チャン！（*バー[チャ]ン！）

以上、小林方言の呼びかけイントネーションは話者間の差異が非常に大きいことを示した。本発表では、この話者間の差異について、小林方言が被った通時的変化が反映されているものととらえる。

小林方言の呼びかけ文が被った通時変化についての本発表での仮説は以下の通りである。かつては最終音節が軽音節の場合・重音節の場合ともに下降が必須の体系（表 2 パターン 1 の段階）であったが、まず下降が必須でなくなる変化が生じた（パターン 2 の段階）。ついで、最終音節が軽音節の場合に下降が失われる変化が起き（パターン 3 の段階）、その後、最終音節が重音節の場合においても下降が失われる形の通時変化が生じた（パターン 4 の段階）と推察される。

表 2　話者間の差異と通時変化

	最終音節が軽	最終音節が重	
パターン 1（話者 A）	下降あり	下降あり	古い
パターン 2（話者 B・C）	下降あり／なし	下降あり／なし	
パターン 3（話者 D）	下降なし	下降あり／なし	
パターン 4（話者 E）	下降なし	下降なし	新しい

本発表に先立って現地調査を実施した話者の年齢が、概ね若くなるに従って下降が起こらなくなる傾向にあることも、この仮説を支持するものである。この通時変化の過程が、話者間の差異として現れていると本発表ではとらえる。

5.　まとめ

本発表では、小林方言の呼びかけイントネーションについて述べた。第 2 節で述べた通り、小林方言は一型アクセント方言である。80 代男性・話者 A の体系では、平叙文では最終音節において高いピッチが生じるが、呼びかけ文においては最終音節が下降音調を担うことを第 3 節で示した。この下降音調は、最終音節が軽音節であるか重音節であるかに関わらず観察される。平叙文と呼びかけ文は、最終音節における下降の有無で区別される。また、呼びかけ文と疑問文は、疑問終助詞の有無で形態的に区別される。

第 4 節で述べた通り、小林方言の呼びかけイントネーションは話者間の差異が非常に大きく、話者の年齢が若くなるに従って、呼びかけ文での下降が起こりにくくなる傾向にある。小林方言の呼びかけ文において、下降が必須の体系から、下降を失う形の通時変化が生じ、その過程が話者間の差異として現れていることを指摘した。

参考文献

佐藤久美子 (2013) 『小林方言とトルコ語のプロソディー —一型アクセント言語の共通点—』九州大学出版会.
平山輝男 (1936) 「南九州アクセントの研究（二）」『方言』6-5: 50−63.
平山輝男 (1951) 『九州方言音調の研究』学界之指針社.
平山輝男 (1974) 「諸県方言の音調研究」『音声学世界論文集』記念論文集刊行委員会（日本音声学会内）: 761−768.